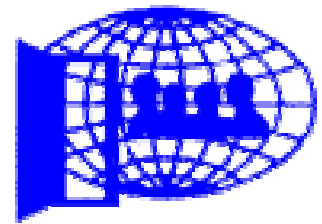




Servas Japan Tohoku

支部会報

No.73



2010年夏サービス受入報告	1
● S.T. さん (M市)	1
● T.N. さん (F市)	3
● N.T. さん (S市)	3
● M.O. さん (S市)	4
● S.M. さん (S市)	5
2010年旅行記	6
● E.T. さん (Y市)	6
編集後記	6

2010年夏サービス受入報告

● S.T. さん (M市)

1. 受入報告

LLさん(オランダ) 5月16日～17日

双子出産後、しばらく活動から遠ざかっていたところに舞い込んだステイの申し込みで、「家は狭いし、散らかってはいるけど、何とかかなるかなあ」と昔の調子で3人の子どもとおもちゃ付きのマンションで受け入れることにした。それにしても掃除、掃除、掃除・・・だけは気になりながら。

4月上旬にFAXでステイ申し込みを受け、こちらからメールで返答し、返信を受け、連絡はそれきり。その後一ヶ月半は、私も日々の生活に追われながらなんの準備も確認の連絡もできないまま、当日になっても到着時間が分からなかった。実際のところ「本当に来るのかしら？」という調子でだったが、こちらもこちらで「日本は初めてじゃないし、旅慣れた人なはずだから、早く到着して時間が余っても何かして待ってると言うから大丈夫よ。」と心配せずに、到着予定日は全日家族で横手の芝桜公園に遊びに行っていた。

4時くらいには帰宅できるかと思いきや、案の定チビを連れての外出に時間は押し気味で、帰宅したのが夕方5時。「もう着いてるかな、疲れてるところを待ちぼうけさせてたら申し訳ないなあ」と大急ぎで帰宅後、留守番電話をチェックしたら、「今、八戸で5時35分に盛岡に着きます。」とメッセージが入っていて、ギリギリセーフ！その足で駅に行き、改札で出迎えることができた。何せ、受入側が今帰ってきたばかりだったので、「お夕飯何がいい？」とその場で聞き、何でも食べると聞き、駅地下の総菜コーナーでお刺身を仕入れ、その日の食事はご飯とお味噌汁とお刺身。それに漬け物とビールで乾杯。旅の話と計画を聞いて、次の日は手作り村に案内しようかと思っはいたが、仕事上のマーケット調査であちこち回ったそうでもあったので、起きてから決めようと、いつも通りチビたちの就寝時間(8時半)にはみんなで眠りについた。

翌日は月曜日だったが、ちょうど唯の運動会の代休で学校はお休み。主人もホストをするつもりで仕事を休んでくれていたので、朝はゆっくり。(とはいえ、チビさんはやっぱりいつも通り6時には起きるのですが・・・)の

んびり朝食をとりながら、計画を立てようとしていたら、「田沢湖に行って、乳頭温泉を何件か見てきたい。」ということで、それでは手作り村なんぞに半日も使ってもらえないだろうと、終日別行動することにした。出発前に長女の唯(6歳)が R さんを案内して駅の観光案内へ行き、その後は私たち家族は手作り村へ、R さんは「6時か7時には帰る」とだけ言って田沢湖に向かった。

夕方、6時になっても戻らないのでちょっと心配し始めた家族に、やっぱり私は「大丈夫、大丈夫。何かあったとしてもなんとかしてるから」とお夕飯の準備していた。7時近くにいよいよ自分たちだけで食べ始めようかとしたところに、なんと彼女は約束通り戻ってきて、乳頭温泉を歩いて4件回ってきたという・・・。「バスの時間まであんまり長いから、一回ヒッチハイクもしたのよ。ちょうど車が来てくれて助かったわ〜。」なんて、さすが日本旅行のエキスパート。治安の良さを心得ており、またその中の驚くべき行動力。脱帽でした。そして、その後は和やかに互いのお土産はなしに花を咲かせ、オランダからはたくさんのお土産を頂き、こちらからはちやぐちやぐ馬っこの置物とマグネット、南部せんべい、南部鉄器製の風鈴、そして家族写真を差し上げた。(準備の悪い私は、彼女が到着してからの会話の中で何に興味があるかをそれとなく聞き出し、その日に訪れた手作り村でそれらを調達しておりました。)そして、やはり8時半にはみんな揃って就寝。

翌日は主人が7時出勤、唯は7時20分登校で、それはそれは慌ただしい中、起きがけの R さんにさよならをし、そのまま目が覚めた R さんは、8時45分のバスで遠野に発った。帰りは超人見知りのツインズもハグして、さよならをし、玄関で送ったと思いきや、下まで見送ると言うので、猛ダッシュで着替えて後を追いかけて、マンションの外まで行って「バイバイ、R さあ〜ん、」と手を振って別れを惜しんでいた。

なんとも慌ただしい日常の中の入受で、チビさんたちの日課に合わせると夜も朝も早め、早めの日課で、旅行者をゆっくり接待するような優雅さはないのですが、久しぶりのホストは私にとっても、家族にとっても素敵な思い出になりました。(おしまい)

2. 再会報告

R K (ハンガリー) 6月15日(火)

先週突然のメールが舞い込み、11年前に久慈でホストした K と再会することになった。今回は長野県で8週間滞在したあと、北海道へと旅行していたところ、青森付近でリスト上の私の名前に気づき(かつては旧姓を名乗っていたため)、連絡をくれたのだった。地図上でみれば、盛岡なら急ぎのスケジュールでも電車の連絡時間の合間に寄れると思ったらしく、1, 2時間のお茶でも・・・、という誘いに、私も懐かしさに即OKした。

とにかく日本が好きで、当時から長期滞在できる仕事を見つけようとしていたが、なかなかうまくいかなかったらしい。私と最初に出会った時から11年間、3ヶ月間の観光ビザだけで日本への出入りを15回繰り返し、いまだに仕事が見つからないと言って、旅行を続けている。自分でも「どうしてここまで日本にこだわってるのかしら・・・？」と自問自答するほど、得体の知れない日本文化の何かに魅せられているようだ。英語教師として大人に教える資格はもっているものの、日本政府はもちろん、ほとんどの英会話学校でもネイティブでないと採用されないらしく、それをひどく残念がっていた。また日本の会社はというと、当然高い日本語能力が必須で、彼女の片言日本語では十分ではなかった。プライベートで英語を教えたり、温泉の住み込みで働いてみたり、京都で裏千家の研修に参加してみたり、思いつくことにはいろいろチャレンジしながら、日本のほとんどの地域は旅行し尽くしたのではないかと思えるが、そうした後でもやはりどうしても日本に住みたいのだろうか・・・。もうひとり、私には再会を果たしたメンバーがいて、彼もとりつかれたように旅行を繰り返す人だった。10年前に始めてあったときに既に40~50カ国は回っていて、11カ国語を操る人だったが、彼にとっての旅行は「瞑想」だった。自分探しに旅に出る人はたくさんいるが、そこまで生涯に渡る長い期間、多くの国々を渡ってもまだ旅行し続ける理由はなんだろう、とやや不思議に思ったものだった。

K は、年頃が私と同じ。母国には目の不自由なお母さんと妹がつかず離れずで住んでいるが、妹さんもやはり結婚していない。海外旅行者には絶大な人気を誇るブタペスト出身の彼女だが、ハンガリー経済についてはあまり楽観的ではなく、戻って落ち着く気持ちもないらしい。これといって何も手伝えることもないまま別れ、彼女の日本旅行はどのようなエンディングを迎えるのだろう、と思いを巡らせずにはいられなかった。

以上です。

PS:

ところで、みなさんは「カウチサーフィン」という組織をご存じでしたか？ K が、サーバス以外に所属する(利用している)組織で、いわば現代版サーバス。掲げる目的と思想はほぼ同じようです。ウィキペディアでの説明

を載せますので、参考にごらんになってみて下さい。2004年に始まり、世界中のメンバー数は既に194万人、登録国数238カ国だそうです。ネット上の情報量は驚きです。サーバスの今後の発展に関わって、参考にする点もあるかと思いますが、またサーバスならではの良さを確認するのによい機会になるかも知れませんので、みなさんサイトをごらんになってみてはいかがでしょうか。

「カウチサーフィン (The CouchSurfing Project) は、インターネット上の無料国際ホスピタリティー・コミュニティであり、現在世界で最も大きなホスピタリティー・エクステンジ・ネットワークである。英語の「couch」(日本語で言うソファー)とサーフィンを併せた名称である。CSともいう。海外旅行などをする人が、他人の家に宿泊させてもらう(カウチをサーフさせてもらう)という形式の相互的な思いやりや信頼による制度である。コミュニティの軸にしたウェブサイトにて、プロフィール、身分確認制度、メンバー同士の評価等により、世界各地のメンバー間で連絡を取り相談の上で宿泊が決まる。2004年1月1日に公式に開始したカウチサーフィンは各国マスコミの過熱報道を受け、2009年9月の時点では、200か国に互る130万人のメンバーがいる。(日本にて活躍しているメンバーは1300人程度。)ウェブサイトとして2008年にページビュー数(ウェブサイトがアクセスされた回数)が1日3千万超であった。サイトは現在、24ヶ国語で使える。」公式サイト：<http://www.couchsurfing.org/>

● T.Nさん (F市)

トラベラーの報告です。

1. トラベラー名 Mrs. L L
2. 国籍 Holland (Amsterdam) 女性
3. 仕事 Owner of Small company
4. 期間 '10 May 20,21,22(朝)
5. 所感:活動:その他

- ・彼女の主な旅の目的は、“旅行会社で利用するための情報収集”のようであった。カバンの中には、目的地で集めたパンフレットが、山ほど入っていた。一部を見せてもらった。
- ・一部、郵便局から送りたいとのことだった。日本人だったら、当然、重い荷物をもって歩くより楽になるので、そうすると思った。
- ・しかし、何より、自分の目で確認して、『商品開発』をする。その心意気はたいしたもの。もちろん、インターネットで検索するのは簡単、彼女は、それでは満足できないのでしょう。
- ・近くの高湯温泉に行く。白い湯(milky)とイオウのにおいの独特な“卵湯”に幸せそうだった。
- ・日本には何度も来ており、日本の状況はかなり理解しているように見えた。私の友人たちにも紹介し、夕食もいっしょにとり、歓談した。

● N.T.さん (S市)

7月10日11日受け入れ報告

J. Wil, M, N(9) and J(5)

オランダの大使館付きで仕事をする奥さんと物理の高校教師と9歳と5歳のお嬢さんの4人が新幹線で白石蔵王に到着し、白石城を訪問。城内で兜をかぶって写真を撮り、抹茶アイスを食べ生協に買い物に。奥さまはスーパーに数多くの食品があることに驚く。特に野菜の種類に驚いていた。オランダにはこんなに種類が多くないのだそうです。家に着くと食事の支度を子どもたちにも手伝ってもらって夕食。お好み焼きの材料を任されたジャスミンは一心にボールの中の小麦粉を混ぜて無事食事が終了。東京は毎日が猛暑日で、ホテル住まいだったことを考えると白石は涼しくて静かで良いという感想。

次ぎの日は、畑仕事。鶏小屋で卵を獲りご満悦の姉妹。先を争って餌をやり、それが終わると丁度熟れたばかりの桑の実を口いっぱい頬張るジャスミン。すっかり畑に慣れた様子でした。子どもに用意した画用紙に絵を描いて数枚を記念において行ってくれました。その日は手巻き寿司。食の細い長女も寿司は大好きで満腹の様子。晩御飯はオランダ料理を作ってくれました。食後は子どもたちの期待していたデザートを食べてさやかな晩さん会。

おばあちゃんがオランダにいと聞き、ビデオカメラでとった映像をDVDに焼いてプレゼント。東京に帰ってからオランダに送ったそうで、元気な孫の様子に喜んでくれていることでしょう。

奥さんの仕事の関係で、東京に4年はいるだろうという話で、これからも日本のあちこちに旅行に行きたいと抱負を述べていました

● M.O. さん (S市)

1. 7月16日(金)~7月18日(日)

M. W(F), J. Wil van P (M), N (F) and J(F) from The Netherlands

我が家初の4人家族受入だった。奥さんの Me は公務員、旦那さんの Jan は高校の先生、長女の N は8歳、次女の Ja は5歳。Me が今年7月から4年間の任期でオランダ大使館で働くために、家族4人で日本へ引越し、仕事の始まる前の1週間、東北地方を旅行したいと言うので、三陸海岸の宮古に2泊、碓氷海岸に1泊、宮城県の鳴子温泉に1泊、宿を予約してあげた。それから、だいたいの見所をメールで教えてあげた。三陸海岸はとてもきれいな所なのに、英語で書かれたガイドブックにはほとんど紹介されていないのが不思議だ。リアス式海岸の美しい景色、海の幸、温泉を満喫できて、とても喜んでくれた。我が家ではお好み焼きを作った。(ところが、5日前に泊まった津村さん宅でもお好み焼きだったということだった。)

2日目、近くの児童館で地域の子供祭が開催されていたので行ってみた。子供たちは¥100 で水ヨーヨー釣り、ボーリングなどのゲームや、お面やぶんぶんゴマなどの工作のし放題、おやつもおもちやもいっぱいもらってご満悦のようだった。お昼からは事務局長の森さんがご自宅でバーベキューに招待してくださっていたので、大勢でお邪魔する。赤間さんも参加され、皆で楽しいひと時を過ごさせてもらった。忙しい中、私たちと彼らのためにご面倒いたいて、森さんには改めて感謝したい。この日の夕食はそばと稲荷寿司とかき揚げ。そばは音をたててすすって食べるのが正しい食べ方なのだ、音をたてないで食べると何だかおいしくなさそうな感じがする、と言うと、皆で上手に「ズズーッ」と音をたててそばをすすっていた。

3日目、午前中に皆で瑞宝殿へ行った。資料館で Me が子供たちに展示物の説明をしてあげているのが印象的だった。子供にとっては退屈かもしれない、難しく理解できないと考えがちだが、ちゃんと噛み砕いて説明してあげればそれなりに理解して、吸収してくれるようだ。だから、子供連れで旅行する時も特別に子供に合わせて行き先を決める必要はないのかもしれない。親が行きたい所へ連れて行っても、子供はそれなりに楽しんでくれるものなのだとことを気付かせてもらった。仙台駅へ戻って昼食をとったが、とにかく観光シーズンということもあり、どこも混んでいて、東京へ戻る新幹線の予約の時間がせまっていた。先に行ってロッカーから荷物を出しているから、後で新幹線の入口で会おうということになり、彼らは先に店を出た。「早く食べないと Ja たちにバイバイ言えないよ」と言う、いつもちんたら食べている私の4歳の息子は、この時ばかりもりもり食べて驚くほど早く食べ終わった。それから急いで新幹線の入口へ行ったが、まだ10分前だというのに、彼らの姿はなかった。発車時間まで待っていたが結局彼らに会うことはできなかった。後で気が付いたことだが、彼らが荷物を入れていたロッカーのすぐ隣に別の新幹線の入口があった。彼らはそこでずっと私たちのことを待っていたのだった。とても楽しい3日間を過ごさせてもらったのに、最後にさよなら言えなかったなんて、何というトンまな私!

でも、大丈夫。彼らとはしょっちゅうメールをやりとりしているし、恐らくこれからも家族ぐるみで付き合える友達でいられると思う。冬休みにでも、東京へ彼らを訪ねて行ってみようかな…。



2. 8月7日(土)~8月9日(月)

K. R (F) from Hungary

とても、不思議な彼女…。ハンガリー出身だが、もう10年もハンガリーには住んでいない。日本が好きで日本に住みたくて、日本でワーキングビザをもらえる仕事を探しながら、日本を3ヶ月の観光ビザで出たり入ったりを繰り返している。外資系のツアーコンダクターの仕事が入ると、現地へ行って働き、仕事のない時はどこかを旅行している、という生活をずっと続けている。私も20代の頃、放浪の旅をしていた時はこんなふうだったに違いない。でも、私は旅行中自分が人に「してもらおう立場」だった分、日本で今度は「してあげる立場」になって

お返しをしたいと思った。世界中を旅行するには一生は余りにも短いし、恐らく私も昔みたいに旅行を続けていたら、こんな風だっただろうな。彼女はいつまで彼女の旅行を続けるのだろう…。

彼女とは仙台駅の新幹線の入口で待ち合わせた。七夕祭の真っ最中だったので、そのまま祭見物に出掛けた。日本の祭が好きだという彼女は、和太鼓やよさこい踊りを見て、祭を満喫したようだった。地元にいるとなかなか七夕など行かないが、私たちにとっても自分の町の祭を久しぶりに見るいい機会だった。夜は近くのファミレスでサラダバーを食べた。



彼女はベジタリアンだ。彼女にベジタリアンになった経緯を尋ねると、「ただ、変化がほしかったから」という。彼女はやや太めなので「健康のことを考えた?」と訊くと、「健康のことなんて全然考えなかったし、今でも考えていない」という。実際、彼女は食欲旺盛で、サラダバーを何度もおかわりしていたし、自分は「マヨラー」だと言うほどマヨネーズが好きで、朝食の卵にはマヨネーズをかけて食べていた。カフェテリアに入っても冷たいスイーツをおかわりしてオーダーする。普段の食事もほとんどがコンビニで買うということだった。私は今までベジタリアンの方々は、体質的な理由か何らかのポリシーがあってそうするのだと思っていたが、そうでもないのかもしれない。今日着る服を選ぶような感覚でベジタリアンになることを選ぶということもあるのかな…。

2日目はまず、定義山(極楽山西方寺)へ行った。すると彼女は「ここ、来たことある!」と言った。昔、ヒッチハイクの旅をしていた時に拾ってくれた人が連れて来てくれたと言う。実際、彼女は日本で泊まったことのない都道府県は佐賀県だけだというくらい日本を知り尽くしている。お昼は名物の三角油揚げを食べたが、ここでも彼女はおぼろ豆腐と田楽をおかわりして食べていた。それから、私が作ったログハウスが見たいということで、途中、轟々峡に寄った後、ログハウスへ連れて行った。

3日目の朝、私たちは彼女を仙台駅まで送り、彼女は青森へ向けて発った。

● S.M.さん (S市)

サーバス受け入れ報告 in 2010 夏

1. Mr. P.L スペイン バルセローナ 47歳 8月9日-11日

子どもが大好きで小学校の先生になったP。旅が好きでずっと独身で生きていくつもりが3歳年上の美しい女性と運命的に出会い、4ヶ月前に結婚した。しかし彼女は旅に興味がなく、40日の夏休み休暇をあこがれの日本に一人でやって来た。私は2004年のバルセローナ国際会議に参加したこともあって彼の滞在を心待ちにした。世界中を旅するためには必要と英語を勉強したというPとの3日間は本当に楽しかった。大きな情熱的な目で一語一語丁寧に話してくれた彼の誠実さも心地よい余韻としていつまでも残ることでしょう。



2. Mr. M.Gi. USA ニューヨーク 50歳 8月13日-14日

ニューヨークの大学で教鞭をとる教授である。専門は「ジャーナリズム」で早い英語で次々に興味深い話をしてくれる。しかしながらこちらの英語力が何分にも足りず、会話は全てが消化不良になった。今年の8/6日の広島、8/9日の長崎の式典にもジャーナリスとして参加していた。彼は何度もアメリカの国に希望が持てないと言った。朝食にパンを食べる私たち、ご飯を食べるマヒュー。彼は小麦粉で作るものパン食の習慣が肥満大国アメリカを作ったと嘆いていた。彼の希望で朝食にご飯をひとりで食べる姿は少々滑稽にも感じた。サーバス・トラベラーの訪問は毎日の生活に刺激を与えてくれるスパイスであると改めて感じた。



3. Ms. K.R ハンガリー ブダペスト 39歳 8月15日-17日

再会。我が家には8年振りの滞在になる。仕事と観光を組み合わせた日本が大好きな彼女の来日は何と17回目となる。佐賀県と茨城県を除いて日本中を旅しているのだからすごい。

日本が安全な国と信じているので今回の東北の旅も下北半島をヒッチハイクで見ても良かった。8年の間の彼女の日本語の上達は大了たものである。9/3日の離日の後、「経済発展のめざましいタイのバンコクでも行こうかな」と言う。余計なこと知りながらやはり心配する私。「ブダペストに帰っても満足できる仕事がない!」と感情を高ぶらせる彼女、結婚などに今さら選択できるはずがないという。女性の自立が叫ばれて久しいが、いまだに女性ならではの人生の悲哀に改めて考えさせられた。

別れの朝、仙台から会津若松までヒッチハイクで元気に旅立って行った。



2010年旅行記

● E.T.さん (山形市)

スリランカ旅行

スリランカに世界遺産の旅を楽しんだ。シーギリヤなどすばらしい遺跡が沢山あったが特に仏教の寺院ではとても感銘を受けた。その敬けんの深さである。

キャンディの仏歯寺では靴を脱いで中に入ると大きな寺にもかかわらず参拝者でごった返し一歩も進めない状態だ。結局奥の院に入るのをあきらめ前を動きながら参拝することとなった。ポーヤデーを過ぎたと言うのに大変な混みようだ。信心の深さを思い知らされた。

また、ダンブッラでは涅槃の石像を見ていた時、小学生の子供三人が胸で手を合わせながら入ってきて像の前で参拝し、そのままの姿で出て行ったことである。

ケラニアの寺院に行った時は日本人だと分かる三鷹の分院だと言って日本の仏像やら日本由来の仏像を説明され、あげくの果て紅白の紐をお経を唱えながら腕に巻いてくれた。日本に帰った今も右手首に巻いたまま外さないでいる。

日本も仏教国ではあるが、スリランカの信仰心との違いをつくづく考えさせられた。

サンフランシスコ講和会議でスリランカのジャヤワルダナ大統領はソ連の提案に反対し日本の賠償請求権を放棄した話は有名だが、いわく「憎悪は憎悪によって止むことなく、愛によって止む」は名言である。

彼は日本が仏教国だから好きだと言っているが、日本の仏教は遠くに置き忘れてしまったのではないか。彼らの信仰心の深さにつくづく考えさせられた次第である。

※ 原稿記載の順番は日付順とさせていただきます。ご了承ください。

編集後記

突然、支部会報の編集を担当することに決まり、そのつもりの準備もしていなかったのに、いろいろ落ち度などあるかもしれません。もし、今回の支部会報に記載されなかった記事を見つけた場合やお気づきの点がありましたら、どうぞお知らせください。今後とも、よりよい支部会報を発行できるよう頑張りますので、よろしく願います。なお、2010年夏は、皆さん、多くの活動をされたようで、現時点までいただいた投稿がたくさんたまったので、第73部を発行する次第となりました。これから、まだ皆さんの楽しい活動報告を投稿していただく予定になっていますので、そちらは第74部として12月頃発行の予定です。投稿して下さった皆さん、ありがとうございました。

M. O.